

### 我が郷に西郷大久保の兩人あり

或時、東湖は海江田信義に向つて問ふ、

「貴藩に名士幾人御座らうか？」

海江田首を捻つて考へ、

「されば、郷國鹿兒島には、有村一郎、杉山龍阿彌、關勇助などありますが、共に老朽郷を出づる事も困難であります。唯だ小生の友人に、西郷吉之助、大久保一藏の兩人あり、共に年少なるも、つとに異物を以て郷黨に稱せらるゝ、將來に望をかくるべき人物と存じます。」

「それは結構、して年配は如何？」

「西郷は今年二十七歳、大久保は二十四歳です」

「誠に宜しい、速かに二士の出府を望む」

海江田之を聞いて、胸間の憂塊釋然として消散し、平生の素志頓に達成せるの感あり、速かに兩人を促して上京せしめんと決し、手の舞ひ、足の踏む處を知らず、雀躍燕舞し辭去し

たといふ。

かくて西郷は、東湖に見出されたのである。

### 眞の賢豪

海江田信義は翌日西郷に書を送つて、速かに江戸に来る様と促した。之に對し西郷からは今貧乏で旅費もないから、早速江戸へ行くことなど思ひもよらぬといふ返事を送つて來た。

その文面は左の如きものであつたといふ。——

「余輩久しく藤田翁の盛名を聞及んで居る。藤田翁は誠に天下無双の賢豪である。今足下幸にして藤田翁に親炙し得たるは、余輩の最も欣然に堪へざる處、而して足下には益々藤田翁の親教を仰がるゝ事を望む。殊に足下已に、余輩の心事を藤田翁に告げられ、藤田翁亦余輩に愛顧を垂れて早く出府を促さるゝ如きは、至幸之に加ふべきものがない。然れども、余輩今尚ほ貧居なれば、出府の事意の如くならず残念である。何れ明年は、藩主（島津齋彬）が江戸へ參府の豫定故、余は其時、中小姓の列に入り、扈從して東上したいと思ふ。但し大久

保は同行出来るかどうかは豫定されない」

是によると、西郷は、鹿兒島に在つて已に、東湖の盛名を聞く事久しいのである。それで當今天下無双の賢豪であると記してゐる。當時餘り賢ことからぬ、多少とも亂暴な方の豪傑が多かつた事であらう。東湖の様に、智仁勇を心がけて居る眞の豪英は乏しかつた事と思はる。西郷は海江田を仲介者として東湖の教を受けて居る氣分であつた。そして東湖が自分に愛顧を垂れて出府を促す旨を知つて憧憬の氣が一ぱい、至幸之に加ふべきなしといふのは西郷の眞情であつた。大久保の出府は豫定しがたいといふ一條は、寧ろ自分を高く標置して居た様に見える。

尙ほ、其の書面の末尾には、戸田銀次郎の事に言及して曰く、

「目下戸田翁も亦江戸在府中と聞く。足下は未だ戸田翁をお訪ね致さずや。余輩の聞く處では、戸田翁は、水戸の兩田の一人にして、藤田、戸田と言はんよりは、寧ろ戸田、藤田と稱せらるゝといふ。足下にして戸田翁の門を叩かば得る處少からざらん」

西郷の此返信の意を海江田は早速東湖に報告した時、東湖は一層慶んだと言はるゝ。

### 昌平費に圍碁を弄する者

燈臺本暗しで、當時、海江田は、水戸兩田の一人たる戸田銀次郎が、江戸出府の事を知らず、遙かに郷里の西郷から注意されたのである。そこで東湖に紹介を乞ふて早速戸田を訪問した。

戸田曰く、

「子が藤田の宅に出入りの事は、余已に藤田から聞いて居る。藤田の如きは、實に當世の賢豪にして其誨を受くるに足る人物である。余の如きは文なく武なく、心中窃かに素餐の罪を謝するのみ。且つ年齢已に老いて大事も出来ないものである。然れども報國の微衷丈けは今に衰へず、庶幾くば、今後子と倍々交誼を厚うせん事を」と。老人謙虛の態度が、又東湖の豪壯とも異つて人を懐けるものがある。

そんな事で、海江田は、其後數度戸田を訪問して話を聴く。一日、戸田は海江田を奥の小樓に導いた。一室六疊頗る幽雅の趣きがある。

戸田語つて曰く、

「是の樓は頃日落成。前面に鬱蒼たるは後樂園の松林に御さる。一たび此樓に上れば、恰も山中に在るの趣きにて、塵機自ら息むを覺ゆる。處で余は少時から笙を好み、之を吹く事を樂みとして居つた。然るに先年藤田と共に禁錮數年に及び、久しく笙を吹かない。近日此樓を經營して幽情轉た動き、一吹を試みやうと思ひ、其旨藤田に語つた。藤田申す事に、笙は雅樂である、彼の鄭衛の卑音とは異なる。之を弄する事固より好し。さりながら畢竟是玩弄の器、遊戯の具である。今やペルリ來航の後、天下紛擾の際故、世人或は吾等を以て逸樂に耽るの徒と評するなきやを慮る。時期尙ほ早し、少時猶豫せらるゝが宜しからんと。そこで拙者も考へ直した。藤田の言ふ處は實理に當る。拙者は藤田の言に依り笙を手になかつたので御さるが、初めに心中忽然此念を發したといふは、是れ余が徳義心の未だ藤田に及ばざる爲めと思ふて、甚だ慚愧致した次第で御さる」

流石に此の老人、義の堅い事、海江田を驚かしたのである。そこへ會ま相馬大膳亮の家老池田圖書が戸田を訪ねて來た。そして一二用談の後、池田は海江田が薩摩藩士なる由を聞い

て問ふて曰く、

「然らば足下は同藩の學生某を御存じで御さるか」

海江田其學生の名丈けは知つて居たので、

「その名は聞いて居ります。以前、彼れ鹿兒島在藩の折、いかゞはしい罪を犯して流刑に處せられたと聞いて居ります」

「其事は拙者も聞いて居るが、彼は能く書を読み、且頗る圍碁に巧みで御さる。拙者前日昌平館に參つた折も、彼れ圍碁を致して居るのを見受け申した。」

黙して兩人の對話を聽いて居つた戸田は、其時、愕然として曰く、

「今日昌平館に於て圍碁を弄する者があらうとは」と。

一座肅然黙して嗟嘆す。やがて他に話を轉じたのであつた。

海江田、他日、同藩士に語つて曰く、

「西郷からの來書にもある通り、戸田、藤田と世間では、戸田を先きにして居る位で、戸田は水戸の兩田の一人として寧ろ年長者なのであるが、却て余に向つて東湖翁を當代無双の賢

豪と推稱したのは、其の温乎たる君子の謙徳であらう。當節、自ら英豪を以て任ずる者、驕慢自尊以て、賢を嫉み善を誇るが如きと同日の比でない。戸田翁の如きは、笙を吹くすら尙ほ世を憚り之を慎んだ位であるから、況んや學館内に於て圍碁を闘はすと聞いて翁の耳底を驚動するも當然であらう。」

### 前頭後倒主君に随つて走す

忠孝は二ならず、文武は岐れずといふ水戸學の立場からして、水戸藩では文弱に流るゝ事を忌み、常に武事を勵んだ。それで、水戸烈公も折々「鳥追ひ」を催した。それは、烈公騎馬にて郊外に出て、鷹を放ち、野鳥を捕へなどして其間に武を練るのである。

一日此の鳥追ひに出て、烈公は馬に乗つて馳せる。諸士は徒歩であるから之に随ふ事が出来ない。唯だ、武術家東湖と小姓の強いのが一人丈け烈公の鞍紐に附隨して前頭後倒以て僅かに之に随つて走せた。かくて主従三人、中途樹蔭に小憩して又馳せた。郊外遙かに出た頃烈公は氣が付いて、先刻の樹蔭で煙草入を忘れて參つたといふ。小姓之を聞いて驚き、早速

引返して取つて參りますといふ。其時、東湖聲を勵して叱して曰く、

「汝知らずや。今已に主君は敵國の境に入つたのである。然るに衆兵路に後れて未だ到らず主君に従ふものは唯だ余と汝あるのみ。主君の危急の場合、しばらくも傍らを離るゝ事相成らぬ」と。小姓頓首して不心得を謝したといふ。その時、烈公は袂から金平糖を取り出して東湖に與へ、

「是は今日の煙草ぢや」といふ。東湖拜跪して之を受け、やがて追ひ付いた諸士に、之を小分して分ち與へた。

武人としての東湖も、此の一事で解るのである。又、金平糖を小分して他徒士に分つなどは、人心を收攬するの器量を窺ふに足るのである。

### 鼠色の人物よ

鳥津齊彬の世子虎壽丸が、六歳で天逝した。齊彬いたく之を悼む。烈公は東湖を使者として弔詞を鳥津公に傳へた。齊彬東湖を懇懇に引見して曰く、

「之れ天命なり、奈何ともすべからず。但し、黄門の弔意を謝し、併せて卿が遠來の勞を謝す」

東湖は、別室に憩ふて居ると、齊彬は、虎壽丸生前の抱え役たりし中山次右衛門の邸に東湖を延き、そこで鄭重なる酒饌を供した。處が、東湖は一箸も付けない。中山異み問ふ。

「藤田先生、お加減でも悪いので御座いませうか」

「否や、何とも御座りませぬ。」と、東湖は惘然として「筆と硯を拜借願ひまする。」中山直ちに侍者を呼んで、筆硯を提供する。東湖は、其の達筆で和歌一首を書き中山に與へた。

「つかへにし君ははかなくなりぬとも忠てふ道の二筋やある」

中山之を一吟して納め、深く歌の意に付いて問ふこともしなかつた。

他日、東湖海江田に告げて曰く、

「余、曩きに貴藩幼君を弔問の日、中山の家に於て酒饌の厚遇を辱ふせられたのであるが、當日齊彬公の心情如何を察し、公の哀悼を推想しては、美酒珍饌喉に下すに堪へず、思はずも一吟を得て中山に示した。余の意は、中山が、余の歌に因み、忠孝節義の談に及ぶであら

うといふ事であつたが、何ぞ料らん、彼れ一吟せしに止まり、談柄遂に此に至らない。余思ふに彼れ中山は恐らく鼠色の人物ならんか」と。

鼠色とは、黑白未定の色で、其人物の正邪未定なるを評したのである。

### 智仁勇具備とや？

西郷吉之助も江戸に出たいと念じて居るが、貧乏で旅費の算段も付かない。折角海江田信義から手紙が来て、自分を藤田東湖に紹介するといふのだから、飛んで行きたいが、それが出来ない。一年餘も経つて、安政元年二月藩主齊彬公が江戸出府の節、やつとお伴に加はつて江戸に出る。早速海江田にも會ひ、東湖に引合された。滅多に頭を下げない西郷も、東湖の前に出た時ばかりは謹嚴、氣を下して長こまつて居たといふから、東湖の氣魄が大したものであつたらしい。

夫れ以來、西郷は再々東湖を訪ふた。東湖にしては、薩藩と共同して、尊皇攘夷の大義を天下に布かんとする肚であるから、薩藩の諸士を歓迎する。今日も西郷は、肥後の津田山三

郎、同じ薩藩の鮫島庄助の二人を誘ふて東湖を小石川の邸舎に訪ふた。東湖喜んで之を迎へたが、互に顔を合せて居れば夫れで事足るので、くどくどと饒舌を弄する事もないのである。やがて東湖は三人を見比べていふ事に、

「今、子等三人の相を見るに、西郷子は勇者の資あり、津田子は仁者の資あり、鮫島子は智者の資あり。扱て三子余を以て何れに屬すと見らるゝか」

西郷、津田の兩人は黙して考へて居ると、鮫島は卒爾として曰く、

「先生の爲人、智仁勇を兼具して居られます」

之を聞くと、東湖は炯々たる巨眼をはつたと見開き、儼乎として叱して曰く、

「子の余に於けるや、交日向ほ浅いのである。子そも何んによつて余が三徳を兼ねるを認知せられしや。拙者が未だ三徳を具備せざる事は我が精神自ら已に之を知つて居る。何ぞ、今、子の評語を博して之を妄信するが如き事あらんや。余が、子等を評するに、智仁勇の語を假つてすれば、子は直ちに取つて餘に三徳を屬するが如きは、是れ即ち、余が子を評して智者の資ありとする所以である。此の如きは、眞の智ではない。寧ろ智術に屬する、眞の智

は仁、勇と離れず、三者皆な具備する處に眞の徳が生ずるのである。故に仁と勇とを離るゝの智は、却て邪智狡獪の徒と墮する。又智と勇を缺ける人は、因循姑息となる。智仁なき勇は、遂に之れ匹夫の勇にして、所謂短氣短慮に失するの暴徒となる」

鮫島、自らの浅薄なる智術を看破されて冷汗背に流れたといふのである。東湖は、忙しい身を以て天下の士を待つもの、それは天下國家の爲に英才を養成したいといふ志望があるからで、徒らに、鷄鳴狗盜の輩を集めて萬遍に御世辭を言ひ、それで、卑俗な人望家にならうなどいふ考へではなかつた。であるから今、鮫島に對しても、假借なく之を叱して將來を戒めたのである。千卷の書を読むよりも、此日の東湖の一喝懇訓は、鮫島に取つて遙かに有益であつたらう。活機を促へるといふ事は東湖の最も重んずる處であつた。故に、東湖は、二百年泰平の餘弊として、當時天下に時務を知らぬ腐儒多く、所謂君子を以て任ずる無能の徒が充滿してゐる事を慨してゐた。そこで、一日、薩摩の士を迎えて、君士小人の辨を一席説く事となつた。

### 自ら君子を以つて居る勿れ

一日、薩藩の士某東湖を訪ふ。東湖稍や閑な日であつたので、諄々説いて曰く、

「他日、子を擢んで、重要政務に立たしむる事あらば如何」

薩士、恐縮して答ふ、

「先生の言は寧ろ小生の恐縮する處。生が如きは只だ一介の茶道たるに過ぎず。而して薩藩の重職を求むるとするも、門閥でなければ出来ませぬ。將た幕府に望をかくるとするも、陪臣の分として及ぶべくもないので御座います。先生の言は木に縁つて魚を求むるが如きに類するのでは御座いませぬか」

東湖はたと睨み、勵聲して曰く、

「子、喋々を止めよ。夫れ子の器識を以てして他日重職に立てりと假定せられよ。其時には子は、決して君子を粧ひ、伊達を飾つてはいかぬ。自ら君子を粧ふ時は、反て小人の圍繞する處となり、媚る者あり、諂ふ者あり、佞言、面諛至らざるなく、唯だ陽に尊敬の色を示し

て、絶へて誠實に交る者なく、陰には反て舌を出して嘲笑する者多きに至る。然うなつた時其人自ら粧ふて己れ君子なりとし、之に加ふるに他の陽尊ある故、何時とは知らず、自ら欺き、揚々自負の極、妄想に陥り、我身は己に聖人の域に達せりと考ふるに至る。而も誤つて一たび此の如き醜念を抱かば、何ぞ能く人心を收攬して人の上位に立つ事を得んや。故にたとひ小人愚者に接する事ありとも、懇ろに誨へ、厚く論して敢て蔑視する事なき様に致さば人皆な其の智徳に服し、恭敬以て眞の君子と稱するに至るで御座らう。人心の趨歸を得る事此の如きに至らば、即ち國民の精神をして凝結一致せしむる事も敢て難事では御座らぬ」

「先生の人心を收攬するの妙諦、誠に理の當然と心得ます。但し、小人と君子の區別並びに之に處するの心術は如何なるものに御座いませう」

「されば、元來君子と小人の區分といふものは判然と付けがたい。今、此の東湖や卿の如き皆な是れ君子なりと假定せんに、扱て、拙者東湖の如きは、時として君子の爲すべからざる事を爲すので御座る。卿とても恐らく然様の事が御座らう。果して然らば、吾人また必ずしも小人の域を脱せざるもので御座る。一方又世間の所謂小人の徒、平生は、放逸懶惰なるも

臣忠子孝の中心に至つては未だ之を失却せざるものあり、此の如きは未だ必ずしも君子に恥ぢざるもので御座る。故に、若し君子にして却て小人の思念を發し、小人にしてまた全く君子の美德を失はずとせば、君子小人の區分果して何れにあらう。然れば即ち、君子體にして却て小人あり、又小人體にして却て君子者たるもの甚だ是なしとすべからず。故に素りに君子小人の別を爲し、以て小人を輕視するが如きは深く誠めなくてはならぬ。古の聖人なる者は固より一片の邪念なく、又一點の汚行もないので御座る。然るに吾人未だ此の如きの地位に達せず、而して自ら君子の體を粧ひ、他を視て小人となすが如きは甚だ道に非ず、慎まなくてはならぬので御座る。」

薩士、之を聞いて、東湖が活眼能く世上を洞察するに驚いた。それで偶と思ひ付いた事には、前日、ペルリが浦賀に來た際同藩の浪士にして日頃酒色に荒み、怯懦なりと見えたる、所謂小人の輩が、反て皆な殊死奮發の壯勢、平時の懦弱に似ず、人の意外に出でたのである故に今東湖の犀利なる觀察を聞き、

「先生の言實は小生の心肝を突き、ひしと思ひ當る事があります。獨り君子小人の別のみならず、怯勇、強弱の分の如きも亦容易に測定出來にくいと思ひます」と、前日ペルリ渡來の時見聞した處を詳しく語ると、東湖膝を拍つて快心し、

「そこが學問の要訣で御座る。讀書の君子で納まつて居る事は往々活眼を缺く處れがある。人心維れ危くと申す、小人も蔑視して之を棄つるは宜しくない。誨訓して之を眞の君子たらしむる心掛けがなくてはならぬ」と語つた。

## 大 嫌 ひ

水戸烈公一日歌筵を設け、側役、用人、小姓等を召した。東湖亦其席に陪した。すると烈公は「大嫌ひ」といふ狂歌の題を一座に賜ひ、各々一首を詠めよとの仰せであつた。東湖即座に、一首を得て、

「大嫌ひ、唐茄子南瓜薩摩芋、君の御前に利口振る人」とやつた。誠に以て傍若無人の謀反骨稜々たる氣風が偲ばれる。それと、斗酒、辭せざる上戸黨の東湖には、芋や唐茄子は嫌ひであつた事も思ひやらるゝ。だが、東湖は錦衣玉食でなく、貧乏な水戸藩の貧乏用人と



して粗食であつた事は間違ひなく、肴は問ふ處にあらず、唯だ錢を酒代に向けたのである。それが東湖をして筋骨の逞しい、色の黒い健康體の強者たらしめたのである。小梅の謫居の間も風呂を沸して温浴は望まれず、日々冷水浴、冷水摩擦をした事など、自然に抵抗養生法に合つたのである。

### 階上階下の對面

晩年の東湖は頗る多忙の身であつた。天下の士を待つにしても、時としてはゆつくり面談の暇がない。海江田なども折角訪問しても東湖と談話の機がない。そんな時でも、東湖は一  
向屈托がなく、

「今日は親しく話をする間がない。然れども余が同志の同藩某々等は當邸内に在宅と覺ゆるからには、彼等と談論して歸られよ」といふ。誠に情に厚く、人を外らさない取なしである。

こんな事が數回に及んだ後、海江田又東湖を訪ふた。東湖寸暇なく、

「折角だが、余が子を見ざる事已に三日に及んで、今日も亦談論の暇がないので御座る。依

てほんの瞬間一面しやう」と、其身は階段を上りかけながら、玄關の海江田を顧みて、

「君の面色は益々勇壯に見える。余の顔容はどうかな？」

海江田仰ぎ見て、

「先生も亦然様に見受けられます」

東湖莞爾として満足げに、

「國家の爲にお互ひ慶賀至極に御座る。然らば今日は之にて別れやう」と、直ちに居室に入り、大事な書きものをするのであつた。

「一飯に三たび呻を吐くと言つた周公の面影が偲ばるゝ」と海江田は他日人に語つたといふ。

粧はず、作らず、大眞流露の英雄の姿がそこに窺はるゝのである。

### 滑稽王高倉を戒む

東湖は、所謂君子風の、温順一方の人ではない。負けることの大嫌ひ、覇氣滿々の實故、

勝負事は大好き、従つて烏鷺合戦の圍碁も好きであつた。碁の相手ばかりは、人を選ばぬもので、町人でも、百姓でも構はない。氣が合ひ、似よりの腕があれば結構面白いのである。それで東湖の碁仇は、川崎某といふ宿屋の亭主が能く出入りしたといふ。

爰に同じ水戸の豪商に高倉某といふものがあり、諧謔を好み、何か言ひ出すと滑稽酒落口を衝いて出て、人の顎を解くと評判を取つた。世人之を滑稽の王と稱した。此の高倉滑稽王一日川瀬教徳翁を訪問すると、先客があつて翁と碁を圍ん居る。其顔は黒く總髪が亂れて蓬の如く、弊衣を着け、一寸見には貧乏浪人の風體、高倉某其の總髪を見て醫者と鑑定し、餘ツ程流行らぬ竹庵と考へた。そこで遠慮なく其の持つて生れた滑稽諧謔を弄し、傍若無人にしやべる。直接人を罵るのではないが、間接には耳障りな文句が出る。處が蓬頭弊衣の客は平然として高倉の言も耳に入らぬ體に悠々と石を下して居る。高倉も少し拍子抜けして語を切り、凝と其人を視てあれば、眼光炯々動止毅然たる大丈夫の相がある。さては何かいはれある人かと心異しみ、座を外して別室に至り家人に向つて、  
「あの客人は誰人で御座る」と尋ねた。家人目を舉げて、

「あの方は、御聞き及びで御座いませうが、藤田東湖先生といふお人で、先年國事に關してお咎めを蒙り久しく幽屏の身で御座いましたが、此頃禁錮も稍や弛み、許されてお友達の方とも往來して居ります。日頃宅の主人とあゝして御好きな碁を圍んで居るので御座います」と語る。

高倉之を聞いてびつくり敗亡。知らぬ事とは言へ、東湖先生程の人物に向ひ、先刻よりの失言、謝するに言葉もない。そこで川瀬翁を別室に引き、取なしを乞ふた。

川瀬翁之に諭して曰く、

「東湖先生は當今日本一の大先生で氣が廣いので御座る。貴公の諧謔の事は疾く御存じでも御座らう。先刻貴公得意の滑稽も其人と知らずに出たものとすれば、是しきの過失位東湖先生別段意にも介せぬ事と思ふ。併し貴公も心安からずとあらば、今日此の席で訛言をいふも妙でない。其中竹隈の東湖先生の邸に參られて失言を謝するが宜しからうと存ずる

流石の滑稽王もすつかりいぢけて、落酒處でなく、悄々として去つた。家に歸つても氣が落着かない。數日考へた末、思ひ切つて東湖を竹隈に訪ふて叩頭罪を謝した。

東湖笑つて曰く、

「そんな窮屈になさらんでも宜しい。前日の事は固より一場の戯譚、何も改まつて謝罪などいふ程の事でも御座るまい。氣を樂になされ。唯だ念の爲め申上げて置きたいのは、滑稽といふ事は固より戯譚に屬し、別段罪のない事の様にもあるが、時あつて或は人を侮るかに聞ゆる事が御ざる。此點お氣を付けらるゝやう」

宏量能く人を容るゝ態度の中に、又こだはらぬ訓戒も含めてある。併し一向無頓着な氣輕さも見えて話頭忽ち他へ轉じ、扱て、

「是しきの事に斯程迄氣を置かれて、今日態々弊屋を訪はれたといふのは、純情嘉すべき次第に存ずる。拙者も快心の事なれば、御ゆるりと遊ばされ、何はなくとも御親近のおしるしを一ツ差上げるで御ざらう」と、直ぐ酒を命じて共に酌み、快談時を移した。高倉滑稽王晴れ／＼して生れ變つた氣分になり、夫れ以來、寡黙重厚な人間となり、終生諧謔を口にしなかつたといふ。

服装頭髮などは一向構はぬ磊落な氣質の東湖には、茶目氣分もあつて、いつも氣が若かつ

た。豊田天功の家に遊びに行つて酒を飲んで居る處へ、姪に當る、天功の子息小太郎の婦、冬女が、障子の隙間からのぞくと、東湖は目敏く見付けて、言葉をかける代りに、あかんべをして見せたといふ話も残る。此の野人、水戸藩に生れて、一生窮屈な思ひをした事が惜しい。幕府方の人として受太刀の地位に立つた東湖と海舟の兩人を、假りに自由な江湖の浪人志士として存分活躍させて見たかつたと誰しも考へる事であらう。

### 天子は父、將軍は子

東湖一日薩藩の志士を引いて語るやう。

「拙者近日特に感ずる處あり、本日は國家の大計上、最重最密の大事を語らう。是は拙者が胸中堅く信ずる人でなくては打明けられぬ事で、此事が幕吏の耳に入らば拙者の一命は保たれず、従つて大事一朝にして去るべし。是れ秘密を要する所以である。子それ能く心せられよ」

藩士、其の熱誠の語調に感じて必ず秘密を守る事を誓つた。

東湖即ち説いて曰く、

「今日幕府は徒らに奢侈に耽り、諸侯亦虚威を張るも、前日の如く米船浦賀に来ると聞いて唯だ狼狽するのみ。何んの施すべき術も知らず、彼れペルリの爲めに非常の國辱を受け、恬として顧みない。それに今後の方策如何と考へる事もしない。こんな事で日を送ると、我が神州の運命果して幾年を保たんか、亡國の機將さに遠きに非る實情と言はなければならぬ。見給へ、今後來り侵して我に無禮を加ふる者豈米國のみならんや。自余の紅毛魯服奴續々來つて我に無禮を迫るであらう。其の時になると、國家間の談判となる。若し我に於て其際、將軍ありて、天子は虚器を擁するのみと言はん事、實に國辱の極であらう。此に於て拙者は一君萬民の大義を明かにせざるべからずと呼號するのである。故に天子自ら世に臨ませ玉ふの機は期せずして至るであらう。併し今日幕府の遣り口は、外國の侮辱に會つて國を開くもので、斯の如くば神州の正氣一朝にして滅却する事となる。故に天子は父の如く將軍は子の如くといふ時世を一日も早く到來せしめなければならぬ。」

「御尤ものお説小生心肝に銘して忘れませぬ。希くは先生自らその首唱者となられん事を」

東湖は

「その事で御座る」と、巨眼一閃眉昂り「拙者の地位は之を許さぬ。是は別に一大主動者を要する。當今海内諸侯を見るに、賢豪能く此任に堪ゆべきは、貴藩の島津齊彬公あるのみ。彼の黒船渡來以來、天下騒然として一大勇斷を要求して居る際故、今、薩藩、首唱して勤王の大義、王政復古を唱ふるに於ては、天下靡然として之に従ふ事とならう。拙者東湖の如きも、其時には内外呼應の大計を策する所存で御座る」

「苟も大義を明かにして人心を正しうせば、皇道又何ぞ興起せざるを憂へんや、斯心奮發神明に誓ふ、古人有言斃而後已む」といふのは、東湖の斯の心情を露はしたものである。

### 死は叨りに口にすべからず

東湖は、水戸竹隈の自宅で、宅愼時代に、私塾を開いて藩の子弟を集め、訓戒を加へて居た。其後、江戸に出て、小石川の水戸藩邸内に居宅を給せられて居た際にも、天下の志士青年が毎日大勢訪ねて來るので、此處も亦私塾同様であつた。一青年數ば來り、いつも慷慨氣

を負ふて「男兒たるもの一死以て國に報ずるあるのみ」と口ぐせに死をいふ。

東湖一日彼を戒めて曰く、

「子は一見以來余に語るに數ば死を謂ふ。惟ふに、士の今日に處するや、固より死生を顧慮すべきものでない。然し、其所を得ないと死も無益に終る事がある。死は決し易い。唯だ其處を得る事が古來士の難ずる處で御座る。拙者も從來死を決する事數回に及んだが、年齢已に知命に垂なんとして尙死なぬ。子とても亦、老年に及ぶ迄は或は長生する事であらう。故に死といふ事は叨りに語るべからざるもので御座る」

三たび死を決して死せずと咏じた東湖が、意外にも震災で壓死した事を思ふと、人間の死といふものは容易に語りがたい。

### 色と酒の交換條件

東湖一日醉余人に語る、

「余常に戸田忠之進や原田兵助と議論する時は、互に優劣ないやうに思ふ。扱て藩公(烈公)

の前に出ると、自分の智識が甚だ及ばざるを覺ゆる。公は洵に得易からざる賢主に在す。唯だ平生聊か女色に過ぐる難あり、依て余竊かに公の爲に之を憂へ、一日直諫を申した。

「公の年齢已に高し、若し色に過ぐれば恐らく賢體を害さるゝ事ならんと存じ、少しく之を節し給はられよ」と。處が公申さるるに、寡人必ず汝が諫めに従ふであらう。唯だ又汝に戒めたいことがある。爾後飲酒の過度を節せよと。余謹んで之を承け、近時酒を減じたのであるが、此の忠告の交換で余は却て不利を招いた。後悔及ばないのである」と一笑した。

こんなに迄打解けた水魚の仲であつたから、此の君臣間、捌けた紙面の往復もあつた事で、或時烈公から東湖に與へた文面中「今回御殿の女中が神田邊の小間物店へ眉を畫くものを注文したところ、番頭は眉を前の物と勘違ひして、或種の秘器を御殿へ届けた。扱て此の仕末はどうしたものか」といふ意味の事が記されて居る。一向蟠りも屈托もなく、どんな事でも打明ける間柄であつた事が示される。

### 東湖と象山

東湖を攘夷黨の旗頭とすれば象山は開國黨の先達である。此の兩人は反對の針路を取つた様に世間から受取られて居た。だが、最も能く東湖を知る者は象山で、象山を最も能く知る者は東湖であつた。兩者肝膽相照すといふのでないが、互に睨み合ひつゝも、何等の私怨なく、何時でも相提携して國家の大事を圖ることの出来る様な間柄でもあつた。

大隈が、自分の青年時代最も感化を受けた二大人物として東湖と象山を挙げた談話の一節にも、

「我輩の青年時代には、東湖と象山は天下一般に認めた有識者であつた。二人の所説は固より同一ではないが、併し之を尊信する青年學生の身にとつては、其の一句一言皆な闇夜を照らす光明であつた。彼等二人者の面目と議論とは我々青年をして飛び立つ如き思ひをさせたのである。」

日本中、當時の志士の目標となる者は、幕府の老中ではなく、水戸藩の側用人藤田東湖と信州松代藩の佐久間象山であつた。西洋の新智識にかけては、東湖と雖も、到底象山に及ばなかつた。唯だ、一世を籠蓋して天下の人才を我が手足たらしむる政治の力量に於ては、象

山と雖も、迎も東湖には及ばなかつたのである。東湖は、徳川の親藩隨一たる水戸藩主烈公の側用人といふ成金であるが、實力に於て烈公を左右し、其の言ふ處聽かれざるなしといふ有様で、言はゞ水戸藩の總理大臣である。東湖は徳川二百年の歴史中稀れなる英雄で、人心收攬といふ仕事にかけては匹儔を見ず、彼は天下の人材を鼓舞作興せしめた。横井小楠、西郷吉之助、橋本左内の如き大處から、下つては、幕府の役人、大浪人、小浪人、各藩の士人天下の書生に至る迄、苟くも俊傑の人と言はれた程の者は必ず、東湖の鑑識を蒙つて後、相場が極まるのであつた。

### 象山は話せる仁ぢや

東湖と象山の顔が合つた最初は、當時の儒者林鶴梁の家で、講書の會の席であつた。其後安政元年の二月、象山は東湖を小石川の水戸屋敷に訪ふて時事を論じた事がある。安政元年といふと其の三月、下田條約が調印されたので、其翌年十月には江戸大地震で東湖は不幸壓死した。其後三年にして井伊大老の時代となり、安政六年には、例の大獄を起して天下の志

士を根こそぎ刑に處したのであるから、此の安政元年頃には、天下相當騒がしく、最早や議論の時代ではない。何にもかも實行でなくては埒が明かない程に時勢が逼迫して居たのである。それで、其の二月に象山は東湖と實行方法の相談に來た事であらう。處が、前きの横井小楠と東湖の「議論熱せず水よりも冷かなり」と言つた調子には行かない。双方の意見が一致しないので、大激論となる。共に煮ても焼いてもといふ老功だから、讓歩も遠慮もして居られない。遂に東湖は機先を制して象山を睨み、

「君の様なわからず家にはモウ絶交だ！」といきまく、

「承知ぢや、僕の方からこそ然うしたい位ぢや」と象山もしつべい返す。

やがて、象山辭し去るのを東湖は玄關へ見送つて、

「修理殿、又やつて御ざらつしやい」といふ。修理は象山の通稱だ。

「何に？ 今絶交したばかりぢやないか。二度と會ふ譯はない」と象山は、馬の様な長面を屹つと東湖に向けて皮肉な目をする。

「否や馬上でお目にかゝる」と、東湖はから／＼と打笑ふ。象山も破顔一笑、頬をふくらし

たから、正面からは耳はまるで見えなかつた。妙な顔で象山の耳は後へ附いて居るのかして正面から殆んど見えなかつたといふ。

象山は小石川の水戸邸を後にして我家に歸る途中、今の東湖との激論を嚙みメめてへて考行くと偶と、又々思ひ付く事あり、引返して再び、東湖の玄關に怒鳴り込み、更に密談時を移した。

遂に象山は辭し去つた。すると、東湖の門人原田明善が不思議な顔をして東湖に向ひ

「先生、今の御仁は誰で御座います」

「あれは松代の佐久間だ」

「如何なる人物にて——」

「なか／＼話せる仁ぢや」

以上、東湖と象山の會談といふのは世上に傳へられる處であるが、どこまでが眞實であるやら頓とわからぬ。東湖が「馬上で又會ふ」と言つた意味は何んの事やはつきりせぬ。

近く、天下の志士達の活動でも始まつて 幕府と志士との衝突も起るべき氣配十分故、何れ

尊攘黨の旗頭と見られてゐる東湖も、馬上の人となつて其間に周旋し、仲裁役を勤める必要も生ずるとすれず、象山とても同じやうな役廻りに矢張り馬上の人となつて活動する事ともならう。つまり兩人轡を並べて、攘夷と開國の兩刀使ひ分けを巧みにやらかさずばなるまいといふ意味でもあらうか。

又、此時象山が東湖を訪ねたといふ理由の一つとしては、當時、神奈川談判に於て、幕吏が下田開港の事を米人に約したといふ噂が専らであつたから、象山は、大いに之を不可となし、我が攻守に不便な地即ち下田の町へ敵を引入れる事は以ての外であるとなし、其事を東湖に圖り、即刻水戸烈公に説いて反對運動を起すべき事を東湖に強要したといふのである。

東湖は嘗て、烈公に向ひ、

「愈よ攘夷の議一決して、幕府に於て、眞に其の覺悟が極まれば、之は否應なし、手前共も馬上采を振らずばなりません。但し其際、軍務方面に用ふべき人間としては、彼の佐久間修理と葦山の江川太郎左衛門が第一人者で御座います。此の二人は兵略にも長じ、又泰西の事情にも通じて居ります」と進言したと言はるゝ。

但し之には異説がある。最初林梁鶴の宅で東湖其他の小集が催された事がある。元來此の鶴梁といふ男は文武兩道の豪傑で、嘉永甲寅正月十一日の作詩には「劍を揮つて長蛇を斬るに由無し。旆を還すの春山一路除かなり。日暮河東郊外月。戰袍馬を駐めて梅花を看る。墨夷船前岬に到る。警を聞き馳せて之に赴き、意を得ずして還る途中の口占」としてある位で彼は。墨夷船の異人を斬つて棄てやうとして前岬に赴いたのである。相當剛い男である。處が前記の小集席上へ裏木戸からのそりと入つて來た長身銳眼の壯士がある。之は佐久間象山であつた。鶴梁は前日象山と激論して絶交を申渡したのであるから。苦い顔をした。象山は洒然として、先日の論争は水に流して、今夕は拙者にも末座に一席を與へよとばかり入り込んで了つた。其席上象山は、東湖の經世論に耳を傾けて居たといふので、之が東湖と象山の初對面であつた。そこで世間では林鶴梁と象山と議論をして鶴梁は立腹絶交を宣した事を誤り東湖が象山に絶交を宣した様に語り傳へたのであるといふ。筋の通つた話。本稿を校正の際此事を知り、附記するのである。他人再版の節は判然した考證を録したいと思ふ。



### 象山の妻妾論

抑も、東湖と象山を結び付けた最初の誘導者は川路聖謨であつた。川路は或時東湖に向ひ「信州松代の藩主眞田幸貫侯は、實に近來の名君である。貴下の藩主水戸齊昭公と交際を結ばるゝに於ては、國家の爲に少からぬ効果ありと信ずる」

そこで、東湖は、藩主烈公に進言して眞田幸貫侯と親交を結んだ。處で、東湖は烈公の側用人として實權を握るに對し、當時象山は眞田侯の黒幕として權力を有して居た。そこで東湖象山の兩人又交りを結ぶに至つたものである。

世間、佐久間象山を以て馬面にして剛岸なる、學究的な理屈家にして、始終四角張つた人間であるかのやうに解釋する向きもあるが、其の世智に長じ、俗事に通じて居る事は大したもの、婦人を御するの道にかけても、海舟の師たるに恥ぢない能率を發揮したものである。其の妻妾論に曰く、

「妾は二人以上置かなくてはいかぬ。若し、妾を一人にして家に入れると、彼女は正妻と寵

を争ひ、正妻を蹴落して己れ且那の寵を獨占しやうと不軌を圖り、茲にお家騒動が起つて、醜聲門外に洩るゝ事ともなる。處が、妾を二人以上置くと、妾同士でいがみ合ひ、互に正妻の恩顧を贏ち得やうと念じて、正妻を尊敬する。それなら大したお家騒動にもならず済む」と、かくて象山は、二人以上四人餘りの妾を我家に入れて駕御して居たといふから、人を説服する手腕にかけても相當なもので、天下の志士を手懐けて、虎之皮の敷物に座らせて喜こばして居たといふ。然れば象山の義弟にして且つ門人たる勝海舟が、晩年氷川に蟠居して時の大官を籠蓋し、數人の婦人を御してお家騒動無からしめたあたり、兄貴の衣鉢を襲いで誤らなかつたものであらう。

### 小四郎の母土岐氏

東湖にも妾あり、小四郎の母土岐氏がそれであつた。此婦人は年若く、諸事行届かぬ事多かつた。當時烈公頻りに藩治に心を用ゐ、質素を命じ、依て絹布の服を禁じた。然るに此の土岐氏は、或時絹の衣服を着て外出しやうとする。之を見た東湖母堂は、

「其服は烈公の禁じ玉ふ處なれば無用になされ」と注意しても、土岐氏慢にして服しない。母堂依て東湖に告ぐる。東湖大いに怒り、直ちに土岐氏を離別したといふ。此事に就き、東湖の妹は異議を唱へ、紙面で再三此事を東湖と論争したといふ。併しながら東湖の一斷、嚴として覆水盆に還らなかつたのである。結城寅壽の救命をする程寛大な東湖も、決して婦人の仁に墮しなかつたのである。

### 東湖の文會

東湖が始めて象山に會つたのは、林鶴梁の講書會の席であつた事は前に記したが、此の講書會と同じものかどうか確かとしないが「文會」といふのがあつた。之は、東湖が當時文人墨客等と交際した會合で、東湖は常に、文事は我が長ずる處に非ずと言ひながらも、文筆の事は、父幽谷の純學者たりし資質を承けて甚だ好む處であつた。

それで、自分が主となつて、羽倉管堂、芳野金陵、藤森弘庵、安井息軒、林鶴梁、田口江村、鹽谷宕陰、保岡源吉、杉江治左衛門、江尻莊三郎、奥宮忠次郎、岡谷繁實等と圖り、此

の文會といふのを起し、輪番で會主を定め、一種の雅會を催したのである。處が、一代の大政治家としてあらゆる方面に通達してゐる東湖が主催者である處から、此の會合も、文事よりは、當世の事務を談ずる事が多かつた。入會者が次第に増して後には百餘人に上つた。

右に擧げた外に、東湖が屢々出かけて議論をした仲間に松崎謙堂がある。東湖の議論は老莊孔孟の純學問に關した事よりは、當世の事務、實學に關する事が多いので、先輩たる謙堂も太刀打ちが出来ず、後には、門人安井息軒を相手に出したといふ。息軒は東湖とは氣が合ふ處があり、且文人とか學者とかいふばかりでなく、一種の革新思想を有つた人で、明治の奇傑雲井龍雄は其の門人である。

### 容堂公に謀叛を建言

東湖は純學者として立つ丈の文才がなかつたといふ意味ではない。彼程の良い頭腦であるから、一代前に生れたら、火幽谷同様の學者になれたであらう。唯だ彼の時勢は、其の十八九の時に、夷船渡來騒ぎで一度死を決しなければならぬ様な國事多端の際であつたから、

自然と當世の事務の方へ心血が注がれたものと見るが至當であらう。かくして彼は立派な識見を有した眞の政治家となつた。其の攘夷論も開國の爲めの攘夷であつて、攘夷をする丈けの氣力もない開國は、神州の正氣を滅却せしむるものと見たのである。戦ふ覺悟のない和睦は降伏であるといふ見解であつた。他日小楠が拜外思想の徒であるとして暗殺されたのであるが、東湖をして小楠と地を替へしめば、矢張り君士豹變して拜外思想の持主と見らるゝ事であつたらう。

自らは、頑鈍機を知らざる迂人と稱して居るが、實は目先の利いた先覺者であつた。さればこそ、土佐藩主山内容堂公が安政元年の春、東湖に向つて「今日の時勢に對し、大名たるもの如何にすべきか」と問ふた時、東湖は言下に「今日の大名は御謀叛が上策に候」と答へた。

「若し當時容堂公にして東湖の進言を容れ、早く幕府に對する謀叛の決心をしたなら、土佐の勤王も振ひ、我々も命を的に仕事をしなくともよかつた」とは、田中光顯翁の述懐である。

東湖の七十回忌に田中元顯翁は、蒲原の寶珠莊に東湖の遺墨を掲げ、香華を供へて左の一

首を露前に捧げた。

「七十ちを過ぎし昔の大地震にたふれし國の柱をぞ思ふ」

又山内容堂公の東湖述懐詩にも、

「衆を容るゝは人君の徳と、大聲我に向つて言ふ。其人今安くにかある。一たび逝いて杳たる英魂」とある。東湖は土佐人にも相當知己を得たのである。

### 覇氣は謀反骨なり

東湖が、山内容堂公に對して謀叛を勧めたといふことは一場の酒興にしても、兎に角大膽な言ひ草であつた。東湖は元來が謀反骨を持つた男で、其の身は徳川氏親藩たる水戸家の重職に在りながら、勤王の大義を唱へて宗家を畏怖せしめ、之が爲に蝨居譴責を蒙つた様なのである。

其の謀叛氣は隨時隨處に發露したもので、大醉淋漓たる際には羽目を外づして之を口にし又文にしたのである。前回に述べた「横井小楠へ送つた忘年会席上の詩を、醒めて後稍や不

隠の字句あるやに考へて返戻を乞ふた手紙」の事などを思ひ合せると、之も其の謀叛氣の一端が逆つたものと見える。而して容堂公に對しては「御謀叛が上策に候」と言明したなど、何とも大膽な事である。此の父の氣風を受けた小四郎が、他日筑波山に謀叛旗を擧げたことも、深い因縁であつたらう。山陽が勤王思想を鼓吹した論文が因を爲して、其子三樹三郎が勤王の實行者となり、同じく謀叛人として、日本古狂生の名を恣にしたと好一對なのである。

等しく東湖に似た處のある政治家たる大隈も、明治十四年の政變を起したのは、其の薩長閥に對する謀叛からであつたし、其條約改正も、多分に謀叛氣の仕事であり、又後に「練達の士加藤高明」を次の總理大臣に推薦したのも、同じ謀叛氣の發露であつた。熊澤蕃山も多分に謀叛骨を藏したのであつて、彼をして幕末亂世に生れしめば、餘程變つた經歷を作つた事であらう。古來英傑の士は皆謀叛骨を有つて居た。要するに覇氣は謀叛氣である。

### 三代目がけりをつける

唐様で書く三代目といふが、良い方にも悪い方にも三代目が物を言ひ、鼻を付ける。

純學者としての仕事をした藤田幽谷が初代、二代目の藤田東湖は慷慨家且實行家として幕末に於ける尊攘黨の頭目として、當世の事務を知るの英傑として、天下志士の間に大先生と仰がれた。扱て三代目の藤田小四郎に至つては、幕府に對する謀反人として、筑波に義兵を集めて其帶刀に斬らしめ、遂には幕府の爲に刑戮されて、其首は、水戸の街頭に梟けられるといふことに迄發展した。

だが、是は已に 初代の幽谷に其端を發して居るのである。幽谷が日常口吟した文天祥の正氣歌を孫の小四郎が刑場に於て朗吟し、未だ其篇を終らざるに、刑吏の刃が其頭に下つたのである。幽谷に小四郎の姿を見、小四郎に幽谷の幻を見るのである。初代が蒔いた種が二代に於て花咲き、三代に於て結實を見たのである。

### 藤田小四郎

或る日水戸の弘道館前の廣場に十數人の館生が集つて、悪太郎評議の最中、問題は館愛の

漢籍素讀が詰らないから、モウ止めて武術ばかりやらうといふのである。何れも學問は嫌ひの方と見える。だが、猫の頸へ鈴を附けに行く役目は誰れも難んずる處、よい分別も出ない。一人の少年は思ひ付いて「藤田に相談するとよい。藤田ならきつとよい分別が出来る」といふ。

「何に小四公か！」と叫び出したのは、室田一次郎——後の義文であつた。其頃藤田小四郎は彼れより三四歳の年長者で、人に將たる寛度を備へて居たらしい。小四公は群童を離れて廣場の片隅の大樹の下に何か書冊を立讀みして居た。一人の少年は、小四郎の傍へ走り寄りこつちへ一寸來て呉れといふ。小四郎は動く氣色もない。遙かに見て居た室田一次郎、大聲に「小四公く！」と呼んだか、小四郎は微笑した儘動かない。

「斷髮蓬頭如夜叉、不言而可識是藤田」と自贊した自畫像を残して居る藤田小四郎、寛厚にして又慷慨氣を負ふの雄風あり、已に群童に魁たるものであつた。

室田一次郎堪りかねて、小四郎の傍へ行き、他群童と共に、館校の素讀を止める工夫はなしかと問ふ。小四郎は泰然としていふ。

「それは駄目だ、止める要はないから」

「否や有る。小四公は素讀は得意だからよいかも知れぬが、俺達にはあんな坊主の寢言は御免だ。頭が痛くなる。武術の方がどれ丈け面白いか知れん。斷髮蓬頭の藤田にも武術の方がよからう。子曰くは、いざといふ時に役にも立たぬ」

「しかし學問は必要だぞ。それに止めたいからつて先生の方で止めて呉れんけれア仕方な

し」

「ある、止めて呉れなけれア水をぶっかける」

「そんな事は出来な」

「出来る」

室田一次郎は篤にかゝつて言ひ募つたが、小四郎は、外方を向いて居る。一寸齒が立たないのである。一同は先生に直接談判しやうといふので出かけたが、先生の室の前で立竦んで了つた。そし又元の廣場へ戻つた。

小四郎は之を眺めて哄然笑ひ出し、

「どうだ、一公、先生は矢張り恐からう」

「何に恐いものか」と一公苦笑する外なかつた。

「ふ……、威張つたつて駄目だ」

「何を」と、一次郎は喧嘩腰になるが、小四郎は眞實おかしいといふ様子、

「うふ……、一公だつて逃げ出したんだから」と崩れる様に哄笑する。

一次郎ぶり／＼口惜しがつて、

「逃げたんぢやない、考へ直したんだ」

「うふ……然うだらう、然うに違ひない」と小四郎は猶ほ笑つてゐる、一次郎も口では威張つて見たものゝ苦笑する外なかつた。

こんな點、小四郎は、父東湖の寛厚な襟度を能く會得して居たと見える。

弘道館は、水戸と江戸小石川との二ヶ所にあつた。水戸は三ノ丸にあり、長さ百九十間、幅六間の一棟建で、その内に、槍術、柔術、擊劍、弓、鐵砲等の道場があつた。江戸の弘道館は、それより少し小さく、長さ百三十間、奥行五間。その中に、鐵砲矢場、弓矢場、つゞ

つて隣りに、刀劍の居合の道場、柔術の天神眞揚流、淺間一傳古流等の道場が連つてゐたが、鐵砲、弓の道場は何れも土間、擊劍の道場は各々間口八九間、奥行五間、槍術道場は間口十二間、奥行は擊劍道場と同一であつた、この外、弘道館本館の建物内には、史館があり、此處は總疊になつてゐて、此處で素讀及び講義が行はれた。要するに弘道館は、江戸、水戸共に同一の組織形態で、唯だ僅かに江戸の方が狹隘であつた點が、異つてゐただけである。

弘道館には、東湖も藩政の餘暇には時々見廻つたが、直接生徒に教へる暇はなかつた。室田義文の見た東湖といふのは、眼のぎよろりと大きい、猪首の、色の黒い、まさに偉丈夫の相格骨格で、鋭く光る眼光は、何物をも見抜かずに置かぬといふ風であつた。小四郎は、どちらかと言へば、蒲柳の質で、體軀も餘り大きくなかつた。顔面蒼白で、父東湖に餘り似なかつた。寧ろ三男の大三郎が東湖そつくりで、色も黒く、風采體格、生寫しであつたと言はれる。だが、小四郎は、末子却て東湖の氣風を餘計に承けて、弘道館の素讀には、どこを讀まされても少しも淀まず、すら／＼とやる、ずばぬけて頭腦がよかつた。

殿様墓

今度は江戸の水戸藩邸内の弘道館の庭での或日、小四郎が何かじつと足下を見詰めて居る様子。向ふから之を認めた室田一次郎は、小四公と再度迄呼んでも返事をしない。一次郎づかくと傍へ行つて覗くと、小四郎は大きな墓を見て居るのだ。

「なアんだ、それか」と一次郎は詰らないと言つた聲。

小四郎は猶ほ墓から目を離さず「斯うして見て居ると、墓といふ奴は、如何にも大名らしい處があるよ。泰然自若として、それで居て人を食つたやうな處がある。」

「何が大名なもんか。墓は墓ぢやないか、そんなものは打棄つて早く來ないか」  
そこへ群童大勢集つて、

「何んだ〜？」と騒ぐ。一次郎は一同を顧みて、

「小四公はおかしいや。墓なんか一所懸命見とれて居るんだ」

「詰らない、そんなもの、叩き殺して了へ」と一人がいふ。

「然うだ、首をちよつ切つて刀の尖へ突き刺せ」

「大老の首の様にか」

「然うだ、それがよい」

「やれ〜」

一同いきり立つたのであるが、井伊大老が櫻田門でやられた光景をまさ〜と想像して、何れも顔見合せ、墓は小四郎にお預けとなつた。

墓仙人、墓の術、墓の脂と、墓は妖性のものである。頭山翁御殿場の別荘から、令息立助氏らと一處に箱根の強羅の方へ山中を歩いた時、路傍に墓の死骸が幾つも落ちて居た、翁、立助君と語つて曰く、

「墓は自動車に轢かれるのぢやらう。蛇は滅多に轢かれんそうだが、墓は殺される迄逃げな〜。じつとして死ぬるのぢや、あれはあれでよいのぢや」と

小四郎も墓の教訓で、運命に委かする覺悟を持って居た事であらう。其死に當つて彼れは更に悪びれぬ處がなかつたといふ。

### 祖父傳來の學才

こゝで改めて小四郎の祖父幽谷、父東湖の生立ちを際間見る必要が生じた。

藤田幽谷、名は一正、字は子定、通稱は次郎右衛門、其の祖先は參議小野篁から出た。子孫世々商業を營み來つたが、幽谷は幼にして穎悟人に絶す。立原翠軒の門に入り學を修めた。十三歳の時長久保赤水の壽序を作り、其名文人を驚かす。之からして神童の名を得た。當時立原翠軒は大日本史編纂總裁の職に在り、幽谷の才を異とし、彰考館々生となした。藩主文公の代となり史館の編修に任ぜられ、武公の代にはその總裁となつた、幽谷は豪邁の氣質で至人と言はれた徳行家である。性酒を好み之を邀ふる者あれば、對飲酣暢、雅人たると俗人たるを擇ばず歡を盡して止むといふので、世人から喜ばれた。一生を大日本史の編修に捧げて他を顧みなかつたから著述は少ない。西土詰我記を著はして、天下太平に慣れて遊惰に耽る者を戒めた。他に勸農或問二卷ある。文政九年十二月一日歿す。行年五十三歳。

幽谷は自宅に青藍塾を開いて居た。そこへ諸生を集めて經書の講義をする際、傍らに酒徳

利を置き、がぶく飲む。幽谷に取つては酒は常用の茶や水の如きものであつた。それ程酒が性分に合つたのであらう。東湖も親譲りの酒徒で、天性酒を愛し、少時から飲んで居た。或日幽谷は諸生に講義して側らの酒徳利を取上げたら空になつて居る。異んで諸生に問ふと豈圖らん、稍や後ろ横に坐つて聴講して居る東湖が、逸早く徳利酒を飲み干して居た事がわかつて、幽谷大笑した。

東湖も神童であつた。幼時四歳の時、藩主武公が政事の餘暇鷹狩りに出た。東湖村童等と共に道路に坐して武公を拜した。其の時の動作が成人の態ありと稱せられた。五歳の時、父に従つて始めて武公に謁見を得た。武公東湖の容貌非凡なるを賞したとある。六歳にして孝經の句讀を受けたが、東湖は能く記し、又能く忘れるといふので、こんな處は甚だ無頓着な性質であつたらしい。時に幽谷の友人に宮本虎孝あり、東湖を見てその大人の風あるを稱し竹刀を作つて與へ、下僕らを打たせた。東湖大喜びで毎日此の悪戯に耽り、夫より餘り讀書を好まなくなつた。文政二年東湖十四歳、父に従つて江戸に出て岡田十松の道場に入つて擊劍を學んだ。更に伊能一雲齊に槍術を學ぶ。



### 小四郎筑波山に據る

小四郎も少時から才學を以て稱せられ、性英敏にして大志あり、居常皇運の陵遲を憂ひ、外夷の驕傲を憤り、挽回掃攘の策を論じて居た。併し、長兄健は、此の才氣ある末弟の爲に立身世出の道を柝いてやらうと考へ、父祖傳來の本職であつた水戸彰考館の史館員にしようとして骨を折つた。それで之を豊田天功に依頼した。此事に關して天功から健へ送つた手紙が残る。

萬延元年十二月廿九日の手紙に曰く、

「大日本史の志表編纂の事は、祖父幽谷一生の事業ながら、完結せず、今孫の小四郎が史館員として此事業を繼續する事は、當を得た様にも思はれるが、小四郎の才氣では、そんな細かい編纂などは適せぬかといふ心配もあり、世間ではあんな志表を作るなどは當世の事務にあらず、寧ろ義兵を起すが急務であるなど議論する者もあり、小四郎の氣質は書寫しなどに没頭する仕事は如何にやと憂慮して居る」とある。

更に第二信は文久元年正月十九日で、

「一昨々年八月十八日駒込の水戸邸で烈公の仰せに「小四郎は才氣有りと覺える。才ある者は宜しけれど、又心配もある」と言はれたから、拙者が答へで「大日本史編集の事は精細な考察を要し至て面倒な仕事故、小四郎の性質には如何と思はれ、兎角近來は國中浮論高尙の弊あり、才氣ある者が其弊益甚しく、小四郎編集を務むる事如何あらんと實は不安心に御ざりまする」と申上げると、烈公之を聞かれて「成程近來諸人議論ばかり高く、やらせて見れば其の通り參らぬといふからの」と言はれた。とある。

多分そんな事で、小四郎の史館員採用は沙汰止みとなつたものであらう。小四郎は大鵬の志を懐いて居るので、史館員で納まる柄ではなかつたらう。其中途に小四郎起つべきの時が來た。即ち、文久三年二月水戸藩主慶篤朝廷に召さるゝに及び、小四郎はお伴をして京都に赴く。朝廷では將軍及諸侯を召集して愈よ攘夷の議を決した。三月慶篤江戸に下るに及び、天皇外夷掃攘の詔書を賜はつた。小四郎感奮時期至れりとなし京都に留り同志と議し、鷹司卿及京都の諸公卿に建白書を奉つて叡旨を奉戴すべきことを主張した。四月に至り一橋慶喜

公又、外夷拒絶すべきの詔を奉じて江戸に歸る。小四郎は同志と共に江戸に下り、益す攘夷を主張したが、幕府の要路者皆な因循姑息閣老小笠原長行は外人に應接して措置を誤り、詔を實行する事が出来なかつた。小四郎之を見て大いに憤慨し、再び京都に出て、劃策する處あらんとしたが、幕府は之を差止めて許さない。小四郎此に於て自ら攘夷決行の首謀者たらんと期し、依て幕府方の新徴組隊長鶴殿を訪問して攘夷決行の議を勧めたが、鶴殿は應じない。そこで小四郎は水戸に歸り、やがて筑波山に義旗を挙げやうといふ計劃。府中の金子樓に滞在して居る。その際、軍の血祭りに、幕府の御用學者として承久の故事を調べ、皇室を冒瀆するしれ者として、和學所取締、塙次郎を首め、鈴木重胤、中村敬介の三人を斬つて了ふといふ事になつた。塙は、例の保己一の悴で當年五十餘歳であつた。此の三人は、勤王の士に附視はれ、塙は伊藤俊介、山尾庸三の兩人に斬られ、鈴木重胤は島原藩の驍勇梅村晋一郎に斬られた。

小四郎昵と考へて、

「塙と鈴木は片付けたが、まだ中村敬介が残つて居る。誰れか彼奴を斬つて呉れる人はない

か」と一同を見廻した。敬介は敬宇の通稱である。

「よし、俺れがやらう」と名乗り出たのは、水戸の高島孝三であつた。

小四郎はちらと其方を顧みて、頭を横に振つた。

「高島さんは人を斬つた事がないから駄目だ。薄井さん、貴下に一ツお願ひしたいが如何でせう」といふ。

薄井龍之は言下に應諾した。彼れ其頃は督太郎と呼び、廿八歳の血氣盛り、武藝にかけては山岡鐵太郎と肩を並べる腕前と知られた。併し、小四郎は大事を取つて、薄井に計略を授け、先づ江戸の水戸藩邸に行き、關口權介に萬事の相談してぬかりなくやつてもらひたいと丁寧に念を押した。

其の薄井が、十日餘り過ぎて歸つて來ての報告に依ると、彼は小石川の水戸藩邸へ關口を訪ねる、關口は大事を取つて、昔、藤田東湖の擊劍の師であつた、本郷の岡田十松に談じ、岡田の門弟で小太刀の精妙な小林捨松といふのを借り、薄井に添へて呉れた。薄井は小林を伴ひ、其晩、聖堂の官舎に居る中村敬宇を襲ふた。造作なく敬宇の居室へ踏み込んで、薄井

は語氣鋭く、中村が承久の故事を調べた事を難詰し「聖堂付きのお儒者ともあらうものが聖賢の教に背き大義名文を誤るとは慮外至極。貴公の首を申受くる。但し、言ひ聞きあらば聞いてやらう」と、大きく出た。中村は面色土の如く一言の辯解もない。薄井は疊を叩いて詰寄る小林捨松は小太刀を抜いて、紫電一閃中村へ斬り付けやうといふ刹那、こはそも、隣室の襖を踏倒してまりの如く轉け込んだ一人の老婆、跳ね起きさまに、小林の白刃を袂で包んだ。

事の意外に此方の二人は呆氣に取られた瞬間、老婆は中村を庇つてべたりと膝を折り、

「あいや御兩所暫らくお止まり下さいませ。手前は敬介の首は差上げられぬとは申しませぬ。之には仔細ある事、先々一通り……」

「ふーん」と、聞いて居た小四郎半疊入れて「あの婆さんに狸汁を食はされましたね」いや然う言はれては面目ない様な次第ながら、條理整然、一糸亂れぬあの老母の申開き……」

「何んとか言ひましたらう」と、小四郎は擦つたい顔、薄井は、甚だきまり悪い顔になつて、それでも、整然たる條理のいくさりを繰返さざるを得なかつた。

「先づ彼の老母の言ふこと―妙に顛へ響く聲で、只今襖の蔭で承りますれば、悴が何か大それた幕府の陰謀に荷擔して承久の故事とやらを調べたとか申しまするやうですが、それは些と御推量違いかと存じます。一體此の子は妾が手懸にかけて育て上げ、及ばずながら孔孟の學問も致させたるもの、殊に只今聖堂の儒者を勤めて居ります。皇室の一大事に關はる様な事をお引受けする理合は御さいませぬ。此點は妾、神明に誓つて我子潔白をお申開き致します。承りますれば、承久の故事とやらは、世間に知れ切つた事で、今更ら取調べる要も無さそうなもの。若し此子が萬一にも間違つた事を致します様な事がございませば、妾は年老つてもまだ毫碌は致しませぬ。人様のお手を借るまでもなく、此の手で成敗致します。先づ今日この處は悴の首を妾にお預け下さいませ。そして能く御詮索なされて、確かな證據でも御さいましたなら、其時改めて立派に悴の首を差上げませう。妾も是から悴の秘密書類なりと探しまして、果してそれに關係した事柄を見けましたら、直ぐお宿所へ御通知申します。その時でも遅ふは御ざりますまい。先づ今日この處はといふ譯さ」

「それでお引取りですか」と、小四郎はふふと口を開いて笑つて「薄井さんも失策をおやり

になつた。天誅を行はんとする際、理非曲直の問答は禁物、一旦斯うと見込んだら斷の一字あるのみ。あの中村の阿母といふのは評判の女で、それ位の藝當は朝飯前に出来る。江川太郎左衛門の婢を勤めて居て門番と夫婦になり、一所懸命金を溜めて悴を教育し、中村といふ御家人の株を五十兩で買つて、あれ迄に中村を立身させたのぢや。ふゝ、まア好い、捨て置くとしやう」

此の薄井は廿八歳の先輩であつたから、廿四歳の小四郎は穩かな調子で、擲擧した氣味でもあつたが、大度宏量、人を容れて、此の三代目が、先輩を籠絡して筑波山上の依雲亭に尊攘の大旗を翻したのである。分別盛りの三十四歳迄、モウ十年生きて居たらと、此の三代目には三樹三郎以上の慾が出る。

扱て天下の形勢日に險はしくなる。そこで小四郎は田丸直允と議し、元治元年三月、日光山に會合して尊王攘夷實行を決議した。之を聞いて四方の志士來り集まり、大平山に據り又筑波山に轉じてそこを根據地となし勢力大いに振ふ。幕府では之を忌み、七月に諸藩の兵を

徴して筑波山に攻めよせた。小四郎は同志と兵を進めて高道祖原に出て、之と對戦する。其月九日の夜小四郎は幕兵の本營を襲ひ、奮戦之を破る。諸藩の兵戦はずして遁走した。此時水戸藩内、奸臣政事を紊り、紛擾あり、松平頼徳鎮撫の命を奉じて、榊原照煦等を率ゐ、水戸に赴き遂に那珂港に屯した。小四郎は榊原と合同して水戸の奸臣を討滅し、以て藩論を一定し愈よ勢力を張つて攘夷の大業を成就せんと謀り、依つて平磯村に根據を移した。然るに十月廿三日、榊原等は義學の容易ならぬを憂へ、幕軍に自首して罪を乞ふた。此に於て小四郎は武田耕雲齋と議し、此上は速かに京都に赴き、天關に伏して衷情を訴ふるに如かずとなし、路を中仙道にとり、信濃を経て十二月越前國新保驛に達した。其の折、加賀藩士長原甚七郎京都から國に歸るのと小四郎は途上で遇ひ、加賀は大故藩之に頼つて攘夷の本願を遂ぐる事便宜なれと考へて、一封の書を贈り加賀藩に降つた。幕府では加賀藩に命じて小四郎等を敦賀に禁錮した。かくて慶應元年二月四日小四郎等は斬罪に處せられた。刑に臨み、小四郎は從容として文天祥の正氣歌を高吟し、未だ篇を終らぬ間に首を斬られたといふ。時に年二十四歳、翌三月幕府は其首級を水戸に送らせて市中各所に梟けた。小四郎は明治二十四年

十二月從四位を追贈された。

### 頼家の傳統

轉じて頼三樹三郎の祖父春水の面影を一瞥しやう。彼れ春水は藝州侯の學職、名は惟寛、字は千秋、俗稱は彌太郎、藝州竹原の人。幼にして學問が好き、十七歳京都に出て大阪に留り、十九歳にして生徒を集めて生活の資を得た。天明元年藝藩の校員となり一費の學制を定めた。最初藝藩に事へた時は時俸三十口といふ微祿であつたが、後三百石まで進んだ。文化十三年二月十九日歿す。年七十一、風格峻整、妻子にも情容を許さない。邪を憎み惡を嫉むの念が強かつた。程朱の學を崇び、江戸に在る時幕命により昌平費に書を講じ、程朱の旨を發揮して一時を醒目した。

こんな經歷を見ると、彼れ亦藤田幽谷そつくりな内剛外柔の資で、治世の功臣型であつた。次代の山陽に至つては、其の才氣煥發、常規に甘んぜず。高處大觀の達識を以て海内に名を馳せた。而して三代目の唐様に書いた三樹三郎となると、斬らぬ刀で人を威壓したのであ

る。彼れ名は醇、字は子春、鴨崖、古狂生の號あり。文政八年京都三本木街に生れた。それで三木三郎だ。即ち三樹と號したのである。幼にして才藻穎悟、骨相奇峻とある。父山陽之を愛した。十七歳大阪に遊び後藤松陰の門に學ぶ。翌年江戸に遊び、昌平費に入る。二年後常陸、野州、房總を廻遊す。己にして一旦京都に歸り、又能登、越國、甲信を遊覽し、轉じて更に南海九州を遊歴す。彼れ人と議論の後刀を抜く癖あり、併し斬らない。それで猫の尾といふ異名を附けられた。三樹、梅田雲濱と謀り、攘夷の勅を水戸を賜ふの議を起し、大いに力を致し、周旋百方大計成らんとして捕縛せられたのである。つまり、藤田、頼の兩家共に三代目と同じ密勅問題に依つて非命の死を遂げたといふ因縁話にもなる。

### 小四郎と三樹とは同じ立場

小四郎と三樹三郎とは能く／＼似た立場であつた。二代目の山陽は一世を風靡する大文章家であつたが、彼は極端な議論はしなかつた。そこには東湖と似た、一ツの見識を以て世の中を見て居るから、事功を急いで無理をするといふ事はなかつた。然るに三樹三郎に至つて

は、もう無理亂暴手が付けられない。彼れ十七歳、江戸に上つて上野東照宮の石燈籠を蹴倒し、葵の紋を斬るといふ思ひ切つた所作を演じ、其爲めに幕吏に捕へられ、漸く謝罪して赦された。父山陽位のゆとりがなかつた様子で、見あたり次第、手あたり次第、才氣の迸る處何んでもやつて見る。親の威光をかさに着るといふ稚氣も手傳つて銜氣も多分に生じ、やんちゃをやつたのであらう。

双方の文才だけを比較すると、山陽と三樹は各々東湖と小四郎に優つて居た。併しその經國の才に於ては、共に東湖と小四郎に遙かに劣る。山陽父子は遂に文人であり、東湖父子は實行を旨とした經世家である。三樹は古狂生と號し狂暴な行動を好んだけれども、猫の尾といふ異名で、眞の國士らしくなかつた。威勢のよい論客位の處で、長命した處で、幕末の大先生らしい風格には達しなかつた事であらう。そこへ行くと、小四郎の方は四五十才まで長命したなら、随分えらい先生株になつて居たらう。彼れ生れて英敏才學を稱せられたといふのであるから、勉強したら、相當高い處まで達した事であらう。

### 東湖の詩文は晩學

山陽は、其著「日本外史」に一生の心血を注いだ。その爲には、白河樂翁公即ち松平定信に取入り、自作の外史を樂翁公に献じて其の臺覽に供し、之を立派な國史として承認せしむるに苦勞した。併し、彼は劍を按じて慷慨虜使を斬らうなどいふ柄ではない。つまり文人である。山陽の時代には未だ黒船の影も見えない。世は太平で刀を抜く要もなかつた。之に反して東湖の時代は、幕府内部の疲弊と頽廢は極度に達し、志ある者は、書齋にじつとして居られなかつた。彼は武人として政治家としての覺悟を多分に有して居た。終日書齋に座して文を作り詩を賦するといふ間がなかつた。二十才前後に於て文章を練習する事が出来ない者は一生文章家にはなれない。それでも東湖は、四十歳になつて、始めて大いに文章を作つた。其幕府の忌諱に觸れて幽屏の身となつた四五年の間に澤山の著述を爲したのである。故に東湖の詩文は、頗る晩學である。若し彼にして幽閉の身となる事を免れて、モツと順調に行つて居たのなら、碌に詩文を残さずに終つた事であらう。勿論父の傳統を受けて、文章道には

興味もあり、自信もあつたのであるが、其の座敷牢時代の閑暇がなかつたら、遂に筆を執る事も無かつたであらう。

### 此人にして此子あり

どうせ、人間は詰らなく死ぬる運命だ。象山でも、松陰でも、小楠でも、大村でも、西郷でも、名もなき者の闇討ちに遭つたり、賊名を蒙つたり、東湖とてもガタ／＼の地震で歴死は實にあつけない事だ。そんな事なら、東湖を西南地方に生れしめ、勤王志士として京洛の間に活動させたかつた。烈公を擁して將軍家を倒して取つて代るの謀反を計劃して居ると訴へられる位なら、最初から謀反人で立てばよかつた。薩長土肥の志士として幕府へ公然反抗する方がさつぱりして東湖には向く。土佐の容堂侯に對して謀反なさるが宜しいと臆面もなく言つてのけるあたり、東湖は到底謀反人だ。その志を繼いだ西郷も謀反人、其の又志を繼いだ頭山翁も謀反骨稜々として一生當路者を敵にして苛めた。改革者は常に謀反骨の持主である。

謀反人たるべくして謀反旗を擧げなかつた父東湖の意を體した小四公は、遂に筑波山に據つて公然席旗を擧げて幕府の要路者に反抗したのである。僅か廿四歳の青年でありながら水戸の天狗黨を率ひて大事を決行したのである。此父にして此子あり。

### 三樹の詩才

三樹には、人口に膾炙した詩が二つある。檻車江戸に護送の途中、箱根を過ぎての偶感「當年の意氣雲を凌かんと慾す。快馬東に走せて山を見ず。今日遲途春雨冷かなり、檻車夢を揺がして函關を渡る」といふ七絶で、明治の青年に愛誦されたものである。モーツは七律で「雲を排して手つから妖嬈を拂はんと欲す。失脚墜ち來る江戸の城、井底の痴蛙憂慮に過ぎ、天邊の大月光明を欠く。身は鼎鑊に臨んで家に信なく、夢に鯨鯢を斬つて劍に聲あり、風雲多年苔石の面、誰れか題せん日本古狂生」といふのである。彼れの書も亦父山陽に能く似て居る。細宇の行體は寧ろ父よりも面白い。其詩才も、北海道巡遊の折り、江刺の町で、紀州の傑士松浦武四郎と二人會して、終日詩酒徵遂の豪快をやり、兩人百詩百印の風流を闡

はしたいといふ逸話がある。それは北海道の冬の寒い日、早朝から此の兩人、旅館の二階に陣取つて、三樹が一詩を作ると、松浦が其の詩意を汲んで二字乃至五六字の、偶には凸字印迄刻したのである。先づ三樹は「山青殘月薄、燈白古邸寒、橋霜人未通、滿耳水琺々」と出ると、松浦は五分の少印材へ「清曇」と刻した。三樹の第二首「開窓何甚早、今日有清課、印士與吟人、百詩戰百顆」とあつて、松浦は「開窓」の二字を刻した。遂に晩になつて、最後の第百首を三樹は「驩然引太白、一課成時、寒詩與頑印、狂跡留天涯」と筆を擱く。之に應じて松浦は「清課了引太白」の六字を一寸四方に刻して刀を投げたのである。風流雅會偲ばるゝ。若し三樹をして、父山陽の様に天下太平の世に長命せしめば、其の造詣深遠なるものありしならんと思はるゝ。

#### 小四郎の劍氣

之に對して小四郎は分が悪い。彼には世に知られた詩文もない。彼は二十四歳で歿し、其の間江戸に出て、又京阪の間に往來して國事に盡し、ゆつくり詩文に親む餘暇がなかつた。

彼をして五十歳迄長命ならしめば、相當の文藻を成就せしめ得た事であらう。但し彼には餘技としての戲畫が残る。晋の豫讓が、敵の衣を裂くの圖といふのがあり、又自畫像がある。父東湖の畫像も彼れの手に作られたといふ。其の自畫像を見るに豊かな黒髪を總髮にし、伴を一人隨へて、大道を濶歩して居る圖で、其の心境の濶達剛勇を現はしたものである。其の書も、父東湖そつくりなもので、三樹が父山陽に能く似た字を書いたと好一對なのである。父東湖は三たび死を決して死せず、遂に一度も眞劍を試みた事がないのに、小四郎は、自ら衆を指揮して戰陣の間を往來し、幾たびか鮮血を味はつたのである。

三樹にも小四郎にもまだ傳記といふものが書かれてない。兩人共にそちこちに話の種を蒔いてあるが、之を拾ひ集める人もなく、唯だ人名辭書に一頁、半頁と略傳を過されるに記がない。親の威光で餘計に光つた様に言はるゝ兩人は、同時に又親の光りの爲めに自分の輝きを消された形である。

#### 共に國ぶりの辭世を残す



小四郎にも三樹にも共に辭世の歌といふのがある。小四郎のは「かねてより思ひ染めにし言の葉を今日大君に告げて嬉しき」といふのであり、三樹三郎の方は「まかる身は君が代思ふ真心の深からざりしるしなるらん」といふのである。小四郎のは從容笑つて死ぬる形であり、三樹のは、悄然淋しげに述懐して居る形である。一は二十四歳、他は三十五歳で、向ふ見ずの元氣の點に於て小四郎は大いに優るのである。

### 偉人と天變

山陽は、やる丈けの仕事をし盡して死んだが、東湖はやり得べき大きな仕事をやらずに死んで了つた。誠に惜しい事である。東湖の生れたのは文化三年で、山陽の死んだのは天保三年、行年五十三歳であつた。其年東湖は二十九歳である。山陽は東湖に先立つ事二十四年の人である。

東湖の死んだのは安政二年の十月の大地震で、小石川の水戸藩邸内の舍宅で壓死した。其時の模様は、前に記した通りで、母を救ふ爲めに我身命を賭したのである。此の孝道同時に

東湖の忠心を證して餘りある。

西郷には地震の話はないが、頭山翁には關東震災といふ難があつた。其折り頭山翁は御殿場の別荘に避暑中で、御殿場あたりも相當に震動した。氣丈な老母堂は、

「満さん、早く出なされ」と頭山翁を促した。

翁にしては、滅多に家は潰れぬと見てゐるので、端然と坐つて居る。室内の器物など、豆を煎る如くびよん／＼はね上げられる。母堂はもう七十歳を越して居るので、外へ出やうとして立上つたものゝ直ぐ膝を突く。豆煎りにかけられて一步も外へ出る事が出来ない。翁は見かねて老母堂を抱へて椽側から庭へ出て、近間の竹藪へ坐らせる。竹は根が這つて居るので、地割れの虞れもなく、つかまるにも具合のよいもので、昔から地震には竹藪に坐れと言つた。

是れで、安全地帯へ行つたのであるが、翁は、其儘坐つて居るのかと見ると然うではない直ぐ引返して又椽から室へ上つて元の處へ端坐して居る。

「ガチャン」と電燈が落ちて來た。震動が激しかつた事も思ひやらるゝ。何んだか、こう

く地鳴りだか空鳴りだか、物凄いな音がして居る。此世の終りかと思つたといふ位で、頗る不氣味な光景。逆も室内に端坐などして居らるゝ氣持ではないのだが、翁はじつと坐つて居た處へ、今のガチャンで、電燈が落ちて翁の膝頭へ當つて碎けた。其破片が皮膚を破つて血がすうとにじんで來た。

竹藪から見て居た老母堂は「満さん、やつぱり外に居る方がよい……。膝から血が出て居る。庭へ下りて松葉を噛んで汁を付けなされ」と注意する。

手で傷口を押へて居た翁も、老母堂が折角の配慮を無にする事も氣が済まないで、やをら立つて庭へ下り、松葉の汁を傷口へ押し込むとやがて血が止まつた。

隣りは、寺尾亨博士の別荘で、同博士は其折り中風で臥つて居たのを思ひ出して、頭山翁は、其足で見舞に行つた。博士は、疾くに庭先きへ抱へ出されて無事で居たので、翁は我家に歸り、又室へ入つて坐つて居た。

### 東湖夢物語

昔から豪傑の壽命といふ事が興味ある問題にされた「秀吉が、家康死後五六年も長生した」信長が更に十七年も長命で、七十歳迄在世したら」などいふのである。信玄は五十三歳で歿した。東湖は五十歳で歿した。若し東湖が七十歳まで在世だつたら、安政二年から數へて二十年目は明治七年に當る。六十歳迄生きてゐたら、それは慶應元年に當り、小四郎處刑の年である。せめて十年だけでも長命であつたらと考へて見る事も興味深いのである。それが豊臣再興記、義經再興記、俊寛の島抜け歸一法眼といふ事にもなり、大層面白い大衆文藝になるのである。現に、明治三十年頃の日本新聞には「藤田東湖夢物語」として、東湖が長命し、幕府の樞要な地に立ち、大政を奉還して將軍は退隱し、東湖が無血革命を成就して、三百諸侯を召集して帝國議會を開き、其身總理大臣として施政演説を爲し、それこそは東亞共榮圈を計劃して八紘一宇の大經綸を行ふといふ夢幻劇を作つたのである。當時日本新聞は陸羯南、三宅雪嶺、國分青崖などといふ強い人の舞臺であり、東湖夢物語の執筆者は、須。

崎默堂と言つた人であつたかに記憶する。若し東湖が、大震災の奇禍を免れて更に十年間長命したとしたらといふても、之は無理な註文ではない。現に東湖の盟友豊田天功は六十迄長命して、元治元年に歿して居る。其の翌年は慶應元年である。藤田小四郎が筑波に藩旗を擧げたのは同じ元治元年である。小四郎十四歳の時、父東湖は歿したのである。

こんな事からして誰れしもが、東湖追慕の夢物語りをして見たいのであらう。併し之は根據なき空想ではない。東湖がもう十年生きて居たら本當にえらい仕事をした事であらう。何故ならば、東湖は、小梅の謫居といふ一生の大災難を通過して、再び青天白日の身となり、江戸に出て烈公の側用人といふ——玄徳に於ける孔明の如き地位に復したのであるから、もう之からは、前にも後ろにも妨害物はない。それにペリリが黒船に乗つて浦賀に來てからは天下騒然、幕府の威望地に墜ち、二百年も支えた徳川將軍家といふ大伽藍は、屋根から床板迄朽ちて居た。東湖は、薩長士の志士と提携して大政奉還を策する事も出来る。王政復古、藩籍奉還も可能である。

現に東湖が、晩年の劃策の證據が、前記海江田信義との問答にも遺つて居る。即ち東湖は

聲を大にして攘夷を唱ふるも、内心は開國進取に焦慮して居たもので、夫には何よりも三千萬の國民に國を以て斃るゝの覺悟を起さしめ、依て富國強兵の實を擧げ、一君萬民の體制を整へなければならぬ、其の順序としては薩の島津齊彬侯を擁して王政復古の首働者となし、之に依て天下の諸侯を動かさなくてはならぬとしてある。それで東湖は自ら米國に渡航してその實情を視察する事も計劃したのであるし、軍備擴張の細目も立案したのである。東湖の死後、烈公は開老堀田備中に書面を以て自身米國巡遊を試みたと申送つたのである。其文面には「自分も、二百餘年の御厚恩に報ひる事もなく此まゝ死果てるよりは、日本の御爲め米國へ差遣はさるゝ事を望む。若し、此儀許さるゝに於ては、誰れでも志ある者は一所に米國へ行く事を許されたい。百姓町人の二男三男を三四萬人も連れて行きたい。刑餘の者、又死刑囚でも希望者は皆な連れて行き、米國との交易の中繼をしたい。萬一自分始め多くの者が、米國で殺されても、日本の不爲ではない。拙者は用もきな隠居、水戸には當主が残つて居る、又百姓町人にしても不良の次男三男が米國でどうならうと、其家元に恙なき事故、差支なかるべし」といふのである。こんな事は、東湖生存中の獻策であつたらう。

又東湖が最も望を囑した島津齊彬侯の國策中には「支那も已に、長髮賊の亂以來國勢滅亡に瀕してゐる。將來支那は外國の屬領となる外なからう。此時に當り、我日本國獨り孤立して退嬰舊慣に安んずる時は、前途眞に寒心すべし。故に此時に於て全國の諸侯各自方向を定めて分擔し、中國の諸侯は蘭印諸島を攻略し、九州諸侯は安南、ビルマから印度を略し、陸羽の諸侯は山東、滿洲等樞要の地を占領し、我より進んで外に當る事になると、人心自ら興起して國家亦大いに發展する」と論じてある。こんな事も、東湖から誘導されたものと推せられる。

佐久間象山の海防策と言ひ、横井小楠の開國論、島津侯の支那、南洋經略論、橋本景岳の日露同盟論、皆な東湖と相通するものあるを思ふ。是等の原動力となつたものは東湖の經綸であつたと言はる。

藤田内閣の夢物語りも大いに理由ある事である。人しふと雖も、英靈未だ嘗て泯びず、長へに天地の間に在り、東湖の死後八十餘年にして今日その企圖經綸は、正に實現せられつゝあり、死しては忠義の鬼となり、極天皇基を護ると言つた東湖の氣魄は今日一億忠勇の日本

國民を奮起せしむるのである。

### 東湖夫人里子

東湖廿六歳の時郡奉行としての太田在任中、里子夫人を娶る。夫人十七歳であつた。夫人は明治二十五年十二月東京本所二葉町で歿した。時に七十八歳。里子夫人は氣丈の婦人であつたが、東湖が蟄居時代には生計上にも苦勞したらしい。東湖の嗣、健氏の記録に見ると、「東湖が弘化元年五月六日小石川の藩邸内に蟄居仰付けられた時、今迄の側用人の格式を失ひ、月俸僅か十五人口となつた。同二年の春向島の小梅幽居に入ると、月俸七人口に減ぜられ、水戸の梅巷の本宅は沒收され、依て下町の竹隈といふ地に、岩舟の願入寺の屋敷荒廢せる處へ新たにいぶせき茅屋を取設けたるを渡され、家族はそこへ移つた。途中、三才の任と信(小四郎)が泣き／＼人に扶けられて従つたといふ。その零落のさまか思ひやらるゝ。當時家族は十二人の處へ月俸僅か七人口であるから、饑渴に迫る事數々あつた。弘化四年正月東湖赦されて水戸の竹隈の陋屋に歸つたが、依然謹慎とある、その十月廿四日始めて蟄居を免

ぜらる。二年を経て嘉永二年正月から東湖は竹隈に塾を開き、最初は数名の門生であつたのが、追々に數十人に増加し、徳を慕ふて來る者、門前市を爲した。其間も里子夫人は、依然紡績を爲して生計の助けとした。同五年二月東湖は幽居を免るされ、十二月廿八日冤罪全く釋け、依て本祿二百石を賜り、茲に過去九年間の幽夢漸く覺めた感じであつた。同六年正月嗣子健氏は十六歳、東湖は江戸に召され、烈公の側用人に復職して海防係を命ぜられ、祿三百石となる。此歳米艦浦賀に來る。十二月、東湖家族を引纏め、江戸に上つた。此頃より訪問の客日に幾十人、家内の賑ひ一方ならず。昔水戸竹隈の艱難を思へば夢の如し。かくて安政二年の春ともなれば、東湖は馬廻頭の上座に班し、學校奉行を兼ねた。之は軍務の總帥と文教の權職を兼ね東湖の持論たる文事のある者は必ず武備あるを具現し、その「稽古徵今神聖の大道をを發明し、尙武右文天地の正氣を鼓舞す」といふ建前が完成されたのである。そして祿六百石を賜はる。今年五十歳といふ思慮分別の頂點に達した處で、其十月二日大震災の爲に斃れた。

此時里子夫人は四十一歳であつたが、同年十二月、健は家督を賜はり、程なく使番に進め

られ、學校へ勤務する事となつた。之は烈公に於て、健に餘暇を與へ、父祖の遺志を繼ぎ、學業を修めさせやうといふ恩旨から出た事である。かくて同六年、健は先手物頭を経て目附に擢んでられた。文久三年に至り健は水戸の徒頭となり學校の教授に兼補された。健は母の膝下に在りて孝養を主としたのである。

元治元年六月、健は召されて藩主の側用人となり、政務に當る。其中、水戸藩は奸黨の勢力強くなり、健は祿矣第宅を沒收され、澁田の牢舎に幽屏された。爲に母と大母と健の夫人とは親族の家に漂寓の身となつた。翌慶應元年二月、弟の信即ち小四郎は越前敦賀で死刑に處せられ、其首を水戸に送り來り市中を引廻して更に梟首された。

慶應三年八月、大母即ち東湖母堂は病歿享年八十七歳であつた。當時藤田家は罪人の家として形の如く弔ひもならず、親戚の力で、夜中に谷中光台寺に葬つた。

明けて明治元年、大政維新、三月十一日皇恩により、健は出獄赦免の身となり、やがて再び御側用人に復した。次で馬廻頭上座に班し、參政に擢でられ、藩制を定めた時、少參事となり、後に權少參事に進んだ。此時弟の任も京都から歸つて來て軍事寮の勤務に召出された

依て家籍を分ち、後權少參事と迄なり、兄弟とも少なからぬ俸祿を受けた。

明治四年の秋、藩制廢せられ、健は縣治に従事する事僅かにして、同五年職を正院に轉じ東京に移り、牛込二十騎町に母共に住む身となつた。然るに其頃水戸城に火災起り、弟の任は其時縣の大屬で、放火嫌疑を蒙り、他數十名と共に水戸獄舎に繋かれ、後東京司法の獄に移されたが、固より身に覺えなき濡れ衣とて、程なく青天白日の身となり、陸軍省に奉職した。

明治十年西南の役の際、政府は、官吏淘汰をした爲に、健は仕籍を脱した。依て其八月山形縣に奉職した。越へて十二年九月には母を米澤に迎へた。十五年三月、再び轉じて健は茨城縣の警部長となり故郷に歸つて安住した。

明治二十二年二月十一日紀元縣の佳日に當り、陛下には、東湖の誠忠を敬感あらせられ、正四位を追贈された。その十二月、皇后陛下には、「東湖の妻今尚ほ存生と聞く。艱難の間、貞操を全くして今に至りしは目出度き限りなり。定めて齡も傾きしならん。能く保養すべきやうと」の御沙汰あり、白縮緬の絹一匹を賜はつた。明る廿三年十月、聖上皇后兩陛下茨城

縣へ御巡幸の際、幽谷、東湖兩人の王事に辛勞せしを叙賞あり、祭料を賜はり、且つ東湖夫人里子を御覽あらせられたしとて、好文亭へ御召しの榮を傳へられたが、當時里子夫人は病體で、之を拜辭した。兩陛下には依て行在所へ健を召され「母病氣の由にて本意なし、能く養生せよ」とて白絹一匹と金百圓を賜ふ。

其後、健は、諸陵助に轉職して、廿四年十月又東京に轉居した。その十二月に長きあたりの恩命あり、幽谷生前の志業を賞し、正四位を追贈、又小四郎へは從四位を贈られ、全家の光榮を極めた。翌廿五年六月、海軍短艇競漕會の時、皇后陛下臨御あり、小梅の徳川家の邸を御休憩所となした折り、「東湖の妻は此邊に住む由見まほし」との仰せ、依て里子夫人は老體を人に助けられて皇后陛下に拜謁し、金子及白絹を賜はり一身の光榮之に過ぎず、之れ偏に先大父君幽谷、先大人東湖の忠誠の精神に感じ賜ひたる聖徳の余恩にして仰ぎ奉るもかしくき事と恐懼感泣に堪へなかつた。其後間もなく里子夫人は本所二葉町の宅で歿したのである。高齡七十八歳の天壽を完ふしたのである。

昭和十七年十月十五日初版印刷  
昭和十七年十月十八日初版發行

(三〇〇〇部)

認 承 協 文 出  
あ 210078 號



著 者  
發 行 者  
印 刷 者  
配 給 元  
發 行 所

人間東湖先生

定價壹圓八拾錢  
送料十五錢

薄田 斬雲

東京市京橋區銀座西八丁目七番地

八幡 兼松

東京市牛込市改代町一三番地

多田 基

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

東京市京橋區銀座西八丁目七番地

株式會社 照文閣

會員番號 一三三三二番  
電話 (57) 三六〇三番  
振替東京 三〇〇八一番

弊社發行の書籍にして落丁亂丁の不完全なる品がありましたる節は  
早速お取換致します。

照文閣の新刊

鈴木善一著

B6判 190頁 價¥2,00 送15  
上製本

興亞運動と頭山滿翁

三聖代に渝るなき翁の憂國熱闘の人生とその大經倫を讃仰する書

東宮操著

B6判 270頁 價¥2,00 送15  
上製本

夫は生きてゐる

偉人故東宮大佐をその胸中に生かして綴る未亡人の手記

瀧澤利量著

B6判 280頁 價¥1,70 送15

維新舉兵史

明治維新尊皇攘夷殉國の真相を敘し時流の趨勢を明示す

井上雅二著

B6判 480頁 價¥2,90 送20

亞細亞中原の風雲を望んで

日本唯一の中西亞踏破記録を持つ著者の中西亞解剖の書

ラス・ビハリ・ボース著

B6判 190頁 價¥1,80 送15

獨立印度の黎明

印度獨立に身を挺して立上つた亡命志士が驟起前夜に物せる書

永井柳太郎著

B6判 260頁 價¥1,70 送15

世界に先驅する日本

大東亞再建の指導精神を遠大なる理念に於いて具體的に論述す





終

